

研究活動

乾 仁 志

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又 は発表 の年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	概 要	編者・著者名 (共著の場合 のみ記入)	該当頁数
(著書)						
(学術論文)						
1. 田谷の洞窟における胎蔵種子曼荼羅について	単著	1979. 12	『密教文化』128、高野山大学密教研究会	横浜市戸塚区田谷町の定泉寺に、旧称「瑜伽洞」（通称「田谷の洞窟」）と呼ばれる人工の地底伽藍があり、その中に胎蔵種子マンダラがある。このマンダラについては、従来マンダラを構成する種子と尊名が一致しないことが謎とされてきた。ここでは、このマンダラは普門と一門の折衷マンダラであることを指摘し、中世浄土信仰の影響を受けて、真言門の立場から阿弥陀仏の浄土思想を胎蔵マンダラの中に巧に包摂したものであることを論じた。		42-49頁
同 上	単著	1981. 2	吉田孝著『田谷の洞窟』鎌倉新書、所収（後、宗教工芸社より刊行）			125-132頁
2. 聖衆来迎寺所蔵貝葉について	単著	1982. 3	『密教学会報』21、高野山大学密教学科	大津の聖衆来迎寺に智証大師円珍によって請来されたという貝葉の断簡が伝わっている。この貝葉に記された梵文の内容については、その一部の内容に基づいて、従来は『金剛頂経』の異本、あるいは『金剛頂経』の金剛界品の一部と見なされてきた。ここでは、貝葉梵文の全体を調査対象とし、全文のローマナイズと和訳を付して、『金剛頂経』の本文そのものではなく、『金剛頂経』系統の儀軌の一種であることを論じた。		1-15頁
3. 聖衆来迎寺所蔵貝葉について(二)	単著	1983. 3	『印度学仏教学研究』31-2、日本印度学仏教学会	大津の聖衆来迎寺に伝わる智証大師円珍によって請来されたという貝葉の断簡の内容について、『金剛頂経』の金剛界品の一部と見なす説を訂正し、『金剛頂経』系統の儀軌の一種であることを論じ、さらにその後の調査結果を加え、この梵文内容に関係する経典儀軌について指摘したものである。		134-135頁
4. Vajradhatumukhakhyaanaについて	単著	1984. 3	『印度学仏教学研究』32-2、日本印度学仏教学会	『ヴァジラダートゥムカーキヤーナ』というネパールに伝わる金剛界次第について調査し、この次第は、インドにおける瑜伽タントラの権威者の一人であるアーナンダガルバの『一切金剛出現』というマンダラ儀軌に基づくものであることを、内容項目に基づいて両者を比較し、その中でとくに特徴的な三種三摩地について詳しく論じたものである。		166-167頁
5. 『初会金剛頂経』の菩薩観について	単著	1986. 3	『日本仏教学会年報』51、日本仏教学会	本経に現れる「菩薩」という用語に注目してその使用例を分析し、「菩薩」あるいは「菩薩大士」に対して、「大菩薩」と表現されているところに、本経の菩薩観の特色が窺がえることを指摘したものである。具体的には、釈尊の成道に範を取って記述されている五相成身観という成仏法の中における使用例について検討し、五相の第四段階で「菩薩」あるいは「菩薩大士」が		271-290頁

	同上	单著	1994. 10	『密教大系 第三卷 密教経典』法蔵館	「大菩薩」という表現に変わることを指摘し、この段階で菩薩は質的な変化を遂げることを本文の内容に即して論じた。	150-167頁
6.	『初会金剛頂経』における菩薩の出生について	单著	1986. 12	『印度学仏教学研究』35-1、日本印度学仏教学会	本経の十六大菩薩の出生段における菩薩の出生過程について、インドにおける瑜伽タントラの権威者であるシャーキャミトラとアーナンダガルバの解釈を参考に分析したものである。具体的には菩薩の代表である金剛薩の出生段を取り上げ、その出生過程で「菩薩」という用語が、五相成身観とは逆に「大菩薩」から「菩薩」あるいは「菩薩大士」に変化する事例について考察した。	368-369頁
7.	毘盧遮那如来の〈四種神変〉について	单著	1987. 3	『密教学会報』26、高野山大学密教学科	『初会金剛頂経』の中で、五相成身観に続いて説かれている本文の一節について考察したものである。インド・チベットでは、如来は五相成身観によって成仏して後に四種神変を現わし、さらにその後、須弥山に降って瑜伽タントラを説いたと解釈されている。本稿では、この場合の四種神変が、本経のどの箇所に対応するものであるかをチベットの学匠であるプトンの指摘によって明らかにし、さらにその意味について解釈を示した。	1-17頁
8.	Kriyasamgraha における本尊瑜伽—梵文テキスト (I)	单著	1988. 10	『密教文化』163、高野山大学	『ヴァジラダートゥムカーキヤーナ』というネパールに伝わる金剛界次第は、その後の調査から、ネパール人のクラダッタによって著された『クリヤーサングラハ』の本尊瑜伽に基づくことが判明した。本稿は、この本尊瑜伽の冒頭部分の梵文テキストを提示して、『ヴァジラダートゥムカーキヤーナ』との類似関係を明らかにし、さらに『クリヤーサングラハ』に関わる諸文献について報告したものである。	97-116頁
	同上	单著	1989. 3	『堀内寛仁先生喜寿記念密教文化論集』高野山大学		616-635頁
9.	仏説大乘観想曼荼羅淨諸悪趣経について	单著	1989. 3	『印度学仏教学研究』37-2、日本印度学仏教学会	本経は、従来チベット訳に伝わる『悪趣清浄軌』（九仏頂タントラ）の抄訳であると言われてきた。本稿では、まず本経の内容がチベット訳に伝わるアーナンダガルバの『一切悪趣清浄曼荼羅儀軌』にほぼ一致することを明らかにし、さらにチベットの学匠であるプトンの説に基づいて、『悪趣清浄軌』（九仏頂タントラ）自体の成立に、アーナンダガルバの著作が関与している可能性のあることを指摘した。	829-834頁
10.	Kriyasamgraha の本尊瑜伽—梵文テキスト(上)	单著	1991. 3	『高野山大学密教文化研究所紀要』4	インドにおける瑜伽タントラの権威者の一人であるアーナンダガルバの著した『一切金剛出現』というマンダラ儀軌には梵文写本が存在する。この梵文写本の存在について、かつて報告（口頭発表のみ）したことがあるが、その後他大学の研究者によってローマナイズされた。ただこの梵文写本には一部欠損箇所もある。本稿はアーナンダガルバのマンダラ儀軌に基づいて作成された『クリヤーサングラハ』の本尊瑜伽	152-184頁

11. 同上一梵文テキスト (中)	单著	1992. 3	『高野山大学密教文化研究所紀要』5	伽の梵文テキストをローマ字文によって提示したものである。これによって、アーナンダガルバのマンダラ儀軌の欠損部分が幾つか補充される。	133-160頁
12. バングラデシュの仏教遺跡—特に塔を中心として	单著	1993. 1	『高野山大学密教文化研究所紀要』6	本稿はアーナンダガルバのマンダラ儀軌に基づいて作成された『クリヤーサングラハ』の本尊瑜伽の梵文テキストをローマ字文によって提示したもので、前の同論稿の続編である。	166-198頁
13. 金剛界曼荼羅と仏塔	单著	1993. 12	『印度学仏教学研究』42-1、日本印度学仏教学会	密教はインド仏教の最後期に現れ、とくに西暦8世紀から12世紀にかけて、パーラ朝の支配下にあったベンガル地方やビハール地方を中心に栄えた。高野山大学は、このパーラ朝時代の密教の実態を調査すべく、平成3・4年に計3回にわたって、遺品・遺跡を中心にバングラデシュでの現地調査を実施した。本稿は、その学術調査に基づく報告書で、バングラデシュの仏教遺跡、十字形塔の流れ、密教における塔の位置について論述したものである。	424-428頁
14. 金剛界曼荼羅の三昧耶会について	单著	1993. 12	『密教図像』12、密教図像学会	仏教に対する信仰が発展する上で仏塔信仰が果たしてきた役割は大きい。密教でも仏塔に対する信仰が受け継がれているが、本稿は金剛界マンダラの三昧耶会に画かれる仏塔の意義について考察したものである。ここではマンダラや如来を成立せしむる如来蔵としての金剛界という語の意味を通して、とくに菩提心思想との関係について論述した。	15-29頁
15. Kriyasamgraha の本尊瑜伽—梵文テキスト(下)	单著	1994. 3	『高野山大学密教文化研究所紀要』7	『初会金剛頂経』の四大品には数多くのマンダラが説かれている。本稿はそれら四大品の各品に説かれている三昧耶会のマンダラを取り上げ、とくに四大品の中で最も中心的な位置にある金剛界品に説かれる三昧耶会の記述を中心にして、仏塔、秘密、陀羅尼、菩提心、三昧耶という重要語の意義および、それらの用語の関係について論述したものである。	91-112頁
16. 中国における『金剛頂経』伝承—『略出経』を中心として—	单著	1994. 12	『高野山大学密教文化研究所紀要』8	本稿はアーナンダガルバのマンダラ儀軌に基づいて作成された『クリヤーサングラハ』の本尊瑜伽の梵文テキストをローマ字文によって提示したもので、前の同論稿の続編である。	1-27頁
17. 『初会金剛頂経』所説のマンダラについて (前)	单著	1995. 12	『高野山大学密教文化研究所紀要』9	中国に伝承された『金剛頂経』の実態について、『金剛頂経』の伝承を中国に最初に請来した金剛智三蔵の訳経に立ち返って検討したものである。本稿では、とくに経題および本文中に「金剛頂」という語が見出されないにもかかわらず、『真実撰経』（通称『初会金剛頂経』）何故『金剛頂経』と呼ばれるにいたったのかを解明し、さらに『金剛頂経』の名の由来について考察した。	133-158頁
				近年、チベットを中心にインド周辺地域の密教遺品の調査が進み、従来わが国に伝承されてきたもの以外にも多くのマンダラ遺品が存在することが報告されるようになった。本稿はそれらの報告を踏まえ、わが国でとくに注目されてきた金剛界マンダラの根本經典である本経に説かれるマンダラについて考察したものである。本経の四大品に	

18. Kriyasamgraha 所説の 金剛界曼荼羅	単著	1995. 12	『印度学仏教学研究』44-1、日本印度学仏教学会	は、計28種のマンダラが説かれているが、ここではその中の金剛界品と降三世品に説かれる各六種マンダラについて論述した。 ネパールのクラダッタによって著された『クリヤーサングラハ』には金剛界マンダラについての記述がある。一つは尊形をもって描かれる大マンダラに相当するものであり、もう一つはシンボルをもって描かれる三昧耶マンダラに相当するものである。本稿では、そのうち本尊瑜伽段に説かれる大マンダラについて、尊名・身色等の項目に分けてマンダラ諸尊の性格を整理し、さらにアーナンダガルバのマンダラ儀軌との相違点について論述した。	342-346頁
19. 《一切如来真実撰經》 的曼荼羅構成と特色	単著	1996. 2.	『国際学術研討会論文集(二) 密教芸術』金色蓮花	本經の四大品には計28種のマンダラが説かれている。しかし、わが国に伝承されてきたマンダラとの関係で、金剛界マンダラについては、従来金剛界品に説かれる六種と、降三世品に説かれる二種のみに関心が払われ、他のマンダラについては十分に研究されてこなかった。本稿は、これら四大品に説かれるマンダラの構成、マンダラの様式、マンダラの種類、諸尊の構成について考察し、さらに四大品の組織概念について論述したものである。	1-14頁
20. 『初会金剛頂經』所説 の四印について	単著	1996. 3	『密教学研究』28、日本密教学会	インドにおける密教の展開過程で、手で或るしぐさを示したり、或る持物の形を表現したりするムドラという印契法が発達した。密教ではそれによって特定の仏菩薩の精神や働きを象徴するようになった。本稿は、本經の金剛界品の大マンダラ儀軌に説かれる大・三昧耶・法・羯磨という四種印のうち、とくに手印にかかわる各尊格の三昧耶印と羯磨印について考察したものである。	13-34頁
21. 『初会金剛頂經』の四 大品とマンダラの特徴	単著	1996. 9	『高野山大学創立百 周年記念 高野山 大学論文集』高野山 大学	本經の四大品には計28種のマンダラが説かれている。しかし従来はわが国に伝承されてきたマンダラとの関係で、金剛界品の六種と降三世品の二種のみに関心が払われ、他のマンダラについては十分に紹介されてこなかった。本稿は図像学的な視点から、これら28種のマンダラを取り上げ、とくに四大品という枠組みの中で、それらがどのような特色をもっているかを指摘したものである。	81-100頁
22. 『初会金剛頂經』所説 のマンダラ (後)	単著	1997. 1	『高野山大学密教文 化研究所紀要』10	本稿は、わが国でとくに注目されてきた金剛界マンダラの根本經典である本經に説かれるマンダラについて考察したものである。本經の四大品には、計28種のマンダラが説かれているが、ここでは降三世品の残りの四種マンダラと遍調伏品と一切義成就品に説かれる各六種マンダラについて論述した。前の同論稿の続編である。	233-260頁
23. 『金剛頂タントラ』所 説のマンダラ (I)	単著	1997. 2	『高野山大学論叢』32	インドにおける『初会金剛頂經』の伝承過程で、その解釈に大きな影響を与えたものに『金剛頂タントラ』がある。マンダラ諸尊の部族組織について、前者は四部族の段階にとどまっておき、五部族の組織は実質的に後者の段階で成立したものである。とくにその前半部には、前者の四部族のマンダラを統合した五部具会マンダラが説か	1-30頁

				れている。本稿は、その五部具会マンガラについて考察したものである。	
24. 『初会金剛頂経』の背景にある大乘仏教—如来蔵思想との関係を中心に—	単著	1998. 1	『高野山大学密教文化研究所紀要』11	インド中期密教を代表する本経は、経題には「大乘経」とあり、また本文には「金剛乘」とある。このように、本経は大乘の伝統を継承するとともに、また密教経典としての独自性も含んでいる。本稿は、インドにおける密教の形成と展開に関連して、大乘仏教と密教との関係について考察したものである。具体的には、本経の背景にある大乘仏教について取り上げ、とくに如来蔵思想の影響について論述した。	204-222頁
25. 『初会金剛頂経』における利他の思想	単著	1999. 5	『日本仏教学会年報』64、日本仏教学	大乘仏教は自利と利他の完成を修行の基本目標に置き、その特色は利他すなわち衆生済度を重視するところにある。密教もこのような大乘精神を基礎に置いている。本稿は、真言行者の基本的立場に関わる問題として、『初会金剛頂経』に説かれる如来出現の意義についてとくに取り上げたものである。具体的には、序文における教主の性格と、さらに流通分における世尊の成道場面を検討し、如来出現の意義として、利他の側面が強調されていることを明らかにした。	1-14頁
26. 『初会金剛頂経』の基本にある如来蔵思想	単著	2000. 1	『高野山大学密教文化研究所紀要別冊』	『初会金剛頂経』の如来蔵思想は『理趣経』の有情加持の法門の影響下にある。本稿では、まずこの問題について確認し、その上で両経に共通する如来蔵思想の源流について検討した。その中で、とくに『初会金剛頂経』の主要な内容が『華嚴経』入法界品と『宝積経』密迹金剛力士会から多くの素材を得ている事実を指摘し、『理趣経』および『初会金剛頂経』の如来蔵説の成立に、これらの経典が影響を与えていることについて考察した。	53-88頁
27. 五相成身観の基礎にある自性清浄心	単著	2000. 12	『高木神元博士古稀記念論集 仏教文化の諸相』山喜房佛書林	『真実撰経』に説かれる五相成身観の前半部を検討し、とくに如来蔵思想との関係を論じたものである。すなわち『真実撰経』は瑜伽行を重視している点からいえば、唯識派（瑜伽行派）の伝統を受け継いでいるが、その成仏思想の根拠そのものは、むしろ自性清浄心である如来蔵説に置かれていると考えるべきであり、このことは『真実撰経』が「界」の概念を中核に置いていることから見ても首肯されることを指摘した。	329-344頁
28. 『初会金剛頂経』に関する覚え書	単著	2001. 2	『高野山大学論叢』36	本経の分量に関しては、中国の唐代に四千頌と伝えられてきたが、現存の梵字写本もほぼ四千頌である。このことから、唐代に伝えられた本経の実態が完成本に近いものであることを指摘した。また本経に付随する十万頌という広本の伝承もインドにおいて行なわれていたことが注釈において確認でき、チベットのニンマ派にも十八種の聖典の伝承があることから、中国に伝えられた十万頌あるいは十八会十万頌という広本の伝承も、それ自体はインドに起源があることを論じた。	1-28頁
29. 『初会金剛頂経』所説の四印について（3）—八供養女・四摂菩薩の三昧耶—	単著	2004. 1	『小野塚幾澄博士古稀記念論文集 空海の思想と文化 <下>』ノンブル社	インドにおける密教の展開過程で、手で或るしぐさを示したり、或る持物の形を表現したりするムドラ—という印契法が発達した。密教ではそれによ	109-125頁

30. 『初会金剛頂經』所説の四印について(2) 一十六大菩薩の三昧耶印一	单著	2004. 6	『佛教文化学会十周年・北條賢三博士古稀記念論文集 インド学諸思想とその周延』山喜房佛書林	て特定の仏菩薩の精神や働きを象徴するようになった。本稿は、本經の金剛界品の大マンドラ儀軌に説かれる大・三昧耶・法・羯磨という四種印のうち、とくに八供養女・四摂菩薩の三昧耶印について考察したものである。	244-261頁
31. 観智院蔵『蓮華部心念誦儀軌』二巻本の翻刻	单著	2004. 12	『密教文化』213、密教研究会	インドにおける密教の展開過程で、手で或るしぐさを示したり、或る持物の形を表現したりするムドラーという印契法が発達した。密教ではそれによって特定の仏菩薩の精神や働きを象徴するようになった。本稿は、本經の金剛界品の大マンドラ儀軌に説かれる大・三昧耶・法・羯磨という四種印のうち、とくに十六大菩薩の三昧耶印について考察したものである。	20-59頁
32. 漢訳経軌に見える入智	单著	2005. 11	『頼富本宏博士還暦記念論文集 マンドラの諸相と文化 上一金剛界の巻』法蔵館	『初会金剛頂經』である『真実撰經』に導入された重要な修法の一つに阿尾捨法がある。これは一種の降神術で、今日いうところのシャーマニズム的要素をもつものである。金剛界法に見える入智は、この阿尾捨法を応用して、金剛杵によって象徴される如来の堅固な智慧を遍入する修法である。本稿は漢訳資料に見える入智について、その印ならびに観想の内容によって三類に分かれることを指摘したものである。	183-198頁
33. 観智院蔵『蓮華部心念誦儀軌』二巻本の翻刻	单著	2005. 12	『密教文化』215、密教研究会	重要度の高いものでありながら、どういふ訳かその存在が指摘されず、また翻刻されないままであった『蓮華部心念誦儀軌』二巻本の後半部を新たに翻刻したものである。	55-80頁
34. 『理趣經』の成立に関する一考察	单著	2005. 12	静慈圓編『弘法大師空海と唐代密教一弘法大師入唐千二百年記念論文集一』法蔵	『理趣經』には十類本が存在するが、内容および分量から、これらは略本7本と広本3本に分けられる。しかしこれら十類本の成立過程については、現在でも学者の見解が分かれている。本稿では、ジニャーナミトラの注釈を取り上げ、これまで問題になってきた「吉祥最勝」が『理趣經』の略本の原初的な形を有すること、またその梵語は“Sriparama”が妥当であることを指摘した。したがって、「吉祥最勝」は「般若經の一種」であるとともに、略本にとっては「原本」に相当し、具体的には玄奘訳『理趣分』のような内容をもつべきである。	245-274頁
35. 関于『理趣經』形成的考察	单著	2005. 12	韓昇主編『古代中国：東亜世界的内在交流』復旦大学出版社	上記[32]論文の中国語訳(劉建英氏の訳)。ただし上記の日本語では少し文章を増広した。	146-166頁
36. 弘法大師の両部思想	单著	2007. 12	『加藤精一博士古稀記念論文集 真言密教と日本文化(上)』ノンブル社	弘法大師の両部思想については、現在もこれを両部不二思想として解釈する傾向が強い。近年、弘法大師の思想は両部不二思想ではないことを指摘する学者も現れたのにも拘わらず、研究者の間ではこの点が十分に認識されてこなかった。本稿は弘法大師の思想を両部不二と捉えるべきでないことを、中国密教に対する最近の研究成果を取り上げながら、新たに論じたものである。必ずしも筆者のオリジナルな学説ではないが、現在でもなお両部不二と解釈する研究者が多いことから、両部不二でないことを指摘する学説を補充す	95-109頁

37. Kukai's Theory of <i>Ryobu</i>	单著	2008. 3	“ <i>Esoteric Buddhist Studies: Identity in Diversity</i> ”, Proceedings of the International Conference on Esoteric Buddhist Studies, Koyasan University, 5 Sept.-8 Sept. 2006”, Koyasan University	本稿は前項の論文「弘法大師の両部思想」と同じく、弘法大師の思想を両部不二と捉えるべきでないことを、中国密教に対する最近の研究成果を取り上げながら、新たに論じたものである。国際学会を通じて、外国の研究者にも紹介することを目的としたもので、必ずしも筆者のオリジナルな学説ではないが、両部不二ではないと指摘する学説を補充する意図をもって発表した。	31-34頁
38. 弘法大師の伝える四種曼荼羅	单著	2008. 6	『空海研究』第四集、空海研究会	弘法大師の『即身成仏義』には四種曼荼羅の考え方は『大日経』にも『金剛頂経』にも見えるとされているが、四種曼荼羅自体は『金剛頂経』において成立した説であることを指摘し、さらに大師の解釈の直接的な典拠は不空訳の『理趣釈』と『都部陀羅尼目』にあることを述べ、そこに見える四種曼荼羅の解釈は、『金剛頂経』の説をそのまま採用されているのではなく、『大日経』の説と折衷した形に内容が改められていることを指摘した。	130-145頁
39. 金剛界マンダラを通して見た密教の特色—特に金剛鈴菩薩を中心として—	单著	2008. 7	『日本仏教学会年報』73、日本仏教学	本稿では金剛界マンダラを取り上げ、密教における修法上の特色について指摘した。修法上の特色というのは、阿尾捨法という降神術が取り入れられている点である。しかし、行者に乗り移るのは如来の智慧である。つまり降神術としての阿尾捨法が、『金剛頂経』において行者を悟りに導く瑜伽法やさらに灌頂儀礼に取り入れられ、より発達した修法に展開したということである。そしてこのような智慧の遍入を基本とする阿尾捨法の実践が、金剛界マンダラに描かれた金剛鈴菩薩の特質になっている。	125-138頁
40. 金剛界マンダラに描かれる賢劫千仏	单著	2011. 3	『密教学会報』49、高野山大学密教学科	わが国に伝来する金剛界マンダラには金剛界九会マンダラ、金剛界八十一尊マンダラ、善無畏所伝の『五部心観』、最澄請来本とも伝わる『金剛界曼荼羅諸尊図様』等がある。賢劫千仏はこのうち金剛界九会マンダラと金剛界八十一尊マンダラに描かれているが、4体を仏形に、996体を菩薩形に描く作品あることを指摘し、また五大院安然の『真言宗教時義』の一分がその文献上の典拠になりうることを紹介した。	157-168頁
41. 『初会金剛頂経』の仏典としての位置	单著	2012. 8	『日本仏教学会年報』77、日本仏教学	『初会の金剛頂経』である『真実撰経』の仏典としての意義を、とくに四大品と教理分の各文末の偈文の考察を通して検討した。経題に大乘経とあり、これらの偈文にはさらにこの経典が善説すなわち仏説であると記される。またそれに続いて金剛乗であると述べられている。この中、金剛乗は密教における修行方法の特殊性に名づけられたものであるが、それが仏説と主張された背景には金剛乗も大乘の菩薩道の理念を標榜し、如来の悟りと救済を主要テーマにしている点で、大乘経典としての意義を持ち得るとの思いがある。	237-253頁
42. マンダラの方位のこと	单著	2014. 3	『密教学研究』46、日本密教学会	インドにおいて『大日経』までのマンダラは本尊が西を向くのを基本としており、それが『金剛頂経』以後のマンダラになると、本尊は東を向くように	11-23頁

				改められた。しかしどういふ訳か、チベットの胎蔵マンダラには金剛界のマンダラと同様に本尊が東を向いたものも存在する。本稿ではその理由として、ツォンカパの『ガクリム』に見られるように、下位のタントラである所作タントラと行タントラにおいても瑜伽タントラと同様に、自己に本尊を生起する修習が認められるとする考え方があり、その影響のあった可能性を指摘した。	
(その他)					
1. 〈書評〉前田崇著『蔵梵漢対照初会金剛頂経索引』(国書刊行会)	单著	1987. 3	『密教学研究』19、日本密教学会	前田崇著『蔵梵漢対照初会金剛頂経索引』を紹介するとともに、誤字誤植と思われるものを含めて訂正の必要な箇所について指摘したものである。	89-96頁
2. 恩師堀内寛仁先生	单著	1989. 3	『思い出の記—堀内寛仁先生の素顔と業績—』高野山大学	高野山大学元教授堀内寛仁先生の喜寿記念に際して、密教学科から思い出の記が発行され、恩師の堀内先生から受けた学恩と思い出について綴ったものを投稿した。	126-131頁
3. Bibliography of Studies on Kobo Daishi and Shingon Buddhism in Western Languages	单著	1990. 1	『高野山大学密教文化研究所紀要別冊』	欧文で書かれた空海および密教に関する書籍と論文のデータを蒐集し目録としたものである。	141-183頁
4. 〈書評〉宮坂宥勝・福田亮成共著『仏教講座16 理趣経』(大蔵出版)	单著	1991. 3	『密教学研究』23、日本密教学会	宮坂宥勝・福田亮成共著『仏教講座16 理趣経』(大蔵出版)について紹介するとともに、一部問題点を指摘したものである。	204-208頁
5. バングラデシュの仏教遺跡と遺品(上)	单著	1992. 5	『中外日報』24698	1991年12月下旬から翌年1月上旬にかけて実施した「第2回高野山大学バングラデシュ密教学術調査」の概要を紹介したもので、その前編である。	1頁目
6. バングラデシュの仏教遺跡と遺品(下)	单著	1992. 5	『中外日報』24699	1991年12月下旬から翌年1月上旬にかけて実施した「第2回高野山大学バングラデシュ密教学術調査」の概要を紹介したもので、その後編である。	1頁目
7. 万燈会願文について	单著	1992. 10	『高野山時報』2636	弘法大師の晩年に高野山で行われた万灯万華会での願文に見える三尺句について、その参考とした文献が従来言われてきた『十地経』ではなく、『普賢行願讃』の可能性のあることを指摘したものである。	4-5頁
8. 十字形のモチーフ—バングラデシュの仏教遺跡	单著	1992. 11	『高野山時報』2641	第1回および第2回の「高野山大学バングラデシュ密教学術調査」の中で注目した十字形仏塔に関して、特にその十字形のモチーフの解釈や問題点を紹介したものである。	2-4頁
9. 小川ゼミと仏教思想研究会	单著	1993. 1	小川美彦訳『ジェイムス・ジョイス『ユリシーズ』第十四挿話』新訳』五月書房	明治大学の恩師である小川美彦先生による『ユリシーズ』の訳注研究の付録に、同先生の知友や弟子による寄せ書きが掲載され、その中で明治大学時代に教えを受けた者としてその思い出を綴ったものである。	224-231頁
10. バングラデシュ密教学術調査(前編)	单著	1993. 5	『高野山時報』2656	1992年11月に実施した「第3回高野山大学バングラデシュ密教学術調査」の概要を紹介したもので、その前編である。	2-4頁
11. バングラデシュ密教学術調査(後編)	单著	1993. 6	『高野山時報』2659	1992年11月に実施した「第3回高野山大学バングラデシュ密教学術調査」の概要を紹介したもので、その後編である。	2-4頁

12. 金剛頂經の参考文献－ 理趣經を含む－	单著	1994. 3	『密教学会報』33、 高野山大学密教学科	真言宗の主要經典である『金剛頂經』 と『理趣經』についての研究書や論文 についての紹介文を分担執筆したもの である。	44-59頁
13. 『密教大系 第三卷 密 教經典』（共解説、松長有 慶）	共著	1994. 10	『密教大系 第三卷 密教經典』法蔵館	『密教大系』（法蔵館）は全12巻から 成る論文集で、その第3巻に密教經典 に関する代表的な論文が収録された。 本稿はその第3巻に収録された論文に 対する解説と評価をしたものである。	松長有慶 439-454頁
14. 密教の主要經典2 『金 剛頂經』	单著	1995. 11	『密教を知るための ブックガイド』法蔵 館	松長有慶編『密教を知るためのガイド ブック』（法蔵館）の中で、真言宗の 主要經典である『金剛頂經』と『理趣 經』についての研究書や論文について の紹介文を担当した。上記[12]を修正 したものである。	67-86頁
15. <新刊紹介>松長有慶 編『密教を知るためのガイ ドブック』法蔵館	单著	1996. 1	『仏教タイムス』1743	松長有慶編『密教を知るためのガイド ブック』（法蔵館）についての新刊紹 介したものである。	9頁
16. 金剛界マンダラの図像 学的研究	单著	1997. 3	平成7・8年度文部 省科学研究費補助金 （基礎研究（C） （2））研究成果報告 書	平成7・8年度の科研費補助金による成 果を報告したものである。この報告書 には、インド・チベット密教の瑜伽タ ントラにおける根本聖典の『初会金剛 頂經』に説かれる28種のマンダラにつ いて検討し、また同經の四大品におけ るマンダラの特徴を明確にし、さらに 中国から日本に伝わったマンダラに影 響を与えてきた釈迦タントラの『金剛頂 大秘密瑜伽タントラ』に説かれる五部俱 会マンダラについて考察したものであ る。	1-114頁
17. 堀内先生に導かれて	单著	1997. 6	『高野山時報』2785	恩師堀内寛仁先生のご逝去を悼み、そ の思い出を綴ったものである。	5-6頁
18. <新刊紹介>田中公明 著『性と死の密教』春秋社	单著	1998. 3	『密教学研究』30、 日本密教学会	田中公明著『性と死の密教』（春秋 社）の内容を紹介し、その成果を高く 評価したものである。	195-204頁
19. 『金剛頂經』の概要	单著	2000. 4	平成11年度真言宗 教学大会第35回高野山 安居会『講義録』	真言宗の所依經典である『金剛頂經』 について、「真言宗との関係」「成立 と伝播」「構成と内容」「思想と意 義」の四章に分けて解説した講演録を 起こしたものである。	1-121頁
20. 大乘仏教から密教へ－ 三密行の思想的源流－	单著	2000. 7	『大法輪』67-7、大 法輪閣	インド仏教史の中で密教がどのように して興起したのか、その歴史と思想を 中心に紹介したものである。	106-109頁
大乘仏教と密教	单著	2001. 9	『仏教思想を読む－ 仏教の基本を知るた めに－』大法輪閣	小文[20]の再録。	212-218頁
21. 『庭儀灌頂行事手鏡』	共著	2000. 9	学修灌頂壇元	高野山で行われてきた庭儀灌頂の手引 き書である『庭儀灌頂行事手鏡』を、 新たに延べ書きにし、訳注を加えたも のである。	1-4頁 1-146頁
22. 金剛頂經（解説）・瑜 祇經（解説）	单著	2001. 6	『仏典入門事典』永 田文昌堂	『仏典入門事典』に含まれる「金剛頂 經」と「瑜祇經」の二項目の解説を担 当した。	159頁 160頁
23. 『中院流四度口決』	单著	2003. 1	中西啓寶	中院流院家相承の四度の口決書とし て、現在に至るまで高野山において常 に依用されてきた、宥快師の『四度口 伝』四巻と宥勢師の『四度口決』四 巻、および新たに宥快師の口伝を記す 龍算師の『四度伝受』一卷の三書を延 べ書きにし、訳注を加えたものであ る。	1-204頁

24. 金剛頂経 国訳・解説・注	单著	2004. 2	『新国訳大蔵経 金剛頂経・理趣経他』(⑩密教部4)大蔵出版	『言にせし、歌にをかんたものなる』		9-102頁 397-432頁
25. 阿尾捨考	单著	2004. 2	『高野山時報』第2998号	『初会金剛頂経』の修法の基礎に、いわゆる降神術である阿尾捨法があることを紹介したものである。		6-7頁
26. <新刊紹介>松本俊彰著『慈雲流 悉曇梵字入門(基礎編)』高野山出版社	单著	2004. 3	『中外日報』第26583号	松本俊彰著『慈雲流 悉曇梵字入門(基礎編)』(高野山出版社)を紹介したものである。		6頁
27. マンダラの瞑想と儀礼(高野山大学夏季生涯学習講座in高野山2004)	单著	2004. 8	高野山大学	真言宗に伝わる両部マンダラを中心にして、マンダラが成立し発展した歴史とその具体的な内容について概説したものである。		1-125頁
28. 真言宗教相全書 第五卷 金剛頂経 上	共著	2006. 2	四季社	漢訳の『金剛頂経』三巻本のうち、第一巻の訓読と現代語訳を提示したものである。編集とはしがきを担当した。	宮坂宥勝	246頁
29. 真言宗教相全書 第六卷 金剛頂経 中	共著	2006. 4	四季社	漢訳の『金剛頂経』三巻本のうち、第二巻の訓読と現代語訳を提示したものである。編集を担当した。	宮坂宥勝	236頁
30. 真言宗教相全書 第七卷 金剛頂経 下	共著	2006. 5	四季社	漢訳の『金剛頂経』三巻本のうち、第三巻の訓読と現代語訳を提示したものである。編集とあとがきを担当した。	宮坂宥勝	273頁
31. 真言宗のお経	单著	2006. 9	『高野山大学選書』第3巻、小学館スクウェア	『大日経』と『金剛頂経』を中心にして、真言宗において重視される経典の成立事情と内容について概説したものである。		64-79頁
32. わが身にひきあてて	单著	2007. 6	『人権講話集「絆」』1、高野山大...	『サンユッタ・ニカーヤ』のパセーナディ王とマツリカー妃の話を取り上げて、人権問題への関心を喚起したものである。		14-18頁
33. 高祖弘法大師御詠歌第一番のこと	单著	2008. 2	『高野山時報』第3126号	高祖弘法大師御詠歌第一番が、慈鎮和尚の五巻本の『拾玉集』に収録されていることを確認したものである。		6-7頁
34. マンダラが語るもの	单著	2009. 3	『平成二十年度高野山教師布教研修会講演録 マンダラ～その命にかえる～』高野山本山布教師会	平成二十年度高野山教師布教研修会での講演録で、金剛界マンダラを中心にして、その意味するところをお話させていただいたものである。		14-63頁
35. 静先生の思い出	单著	2009. 3	『密教学会報』46・47合併号	高野山大学教授静慈圓先生の御退休にあたり、先生の思い出について綴ったものである。		79-84頁
同	单著	2009. 2	『静慈圓先生蘭契録』高野山大学密教学科			79-84頁
36. 授戒の栞(改訂増補版)	单著	2009. 4	高野山専修学院	隆菴和上口授・井上俊杲筆記「授戒の栞」(真別処)の文体を現代文に改め、新たに語注を加えたものである。		1-37頁
37. 日本の大切な文化財を知る	单著	2009. 8	『高野山教報』1451	「高野山大学の人間教育」シリーズに投稿したもので、新たに見つかった四面大日像について紹介したものである。		6-7頁

38. 師を持つことの意味	共著	2010. 1	『高野山教報』14??	「高野山大学の人間教育」シリーズに取り上げられたもので、山脇雅夫准教授の質問に答える形で、恩師の存在の大きさについてお話をさせていただいたものである。	山脇雅夫	6-7頁
39. 空海の生涯とその教え	単著	2010. 3	『大法輪』77-3、大法輪閣	空海の生涯を紹介するとともに、その代表的な著作を概説したものである。		98-103頁
40. 真言宗の仏身論	単著	2012. 4	『季刊 禅と念仏』33	密教の仏身論には、顕教と共通する三身説と、密教独自の四種法身説がある。ここでは前者の三身説を通して、とくに弘法大師の理解する法身の特色について紹介した。		54-57頁
41. わが国に伝わる両部マンダラ	単著	2014. 1	『京都・宗教論叢』8号	密教の特色とも言うべきマンダラを取り上げ、とくにわが国で展開した両部マンダラの成立とその歴史、並びに両部不二思想について紹介したものである。		55-57頁
42. 金剛峯寺蔵の重文大日如来のこと	単著	2014. 7	『高野山時報』3329	わが国における両部不二思想の造形に関わる一例として大日如来像の宝冠を取り上げたものである。すなわち金剛界大日如来の宝冠に胎蔵五仏が描かれているものや、胎蔵大日の宝冠に金剛界五仏が配置されているものがあることを紹介した。		2-4頁
42. 五大明王とは何か	単著	2014. 8	『大法輪』第81巻第8号	五大明王の成立と構成について紹介したものである。		84-86頁
43. 不動明王	単著	2014. 8	『大法輪』第81巻第8号	不動明王の成立とその多様な尊について紹介したものである。		87-92頁